

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：37118

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03036

研究課題名(和文) 特別支援学校のチームティーチングにおける教師間インタラクション

研究課題名(英文) Teacher - Teacher Interaction in Special Needs School for Children with Intellectual Disability

研究代表者

松崎 保弘 (Matsuzaki, Yasuhiro)

福岡女学院大学・人間関係学部・教授

研究者番号：70551745

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：特別支援学校の授業はチームティーチングで行われることが多く、教師間連携は重要である。小学部「朝の会」の授業を分析した結果、主指導員は授業時間の多くを児童だけを観て授業を進行しているが、副指導員は主指導者の行動を確認しながら児童に対する個別の指導・支援を行っていることが明らかとなった。また、主指導者の授業展開から外れた副指導者の意図による指導が頻繁に観察されており、児童の個別指導者としての副指導者の役割が明確になった。さらに、「朝の会」のようなルーチン化した授業では教師間インタラクションに係る教師行動の出現が少ないことが推察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

特別支援学校の授業の多くがチームティーチングで実施されているため、主指導者と副指導者の役割への関心が高かった。一般的に副指導者は主指導者のサブと考えられており、チームティーチングにおいて副指導者は主指導者の指示以外の行動を行うべきでないこと記述した教科書もある(日本肢体不自由教育研究会、2009)。今回の調査において主指導者は主に授業を進行し、副指導者は児童の個別指導・支援を行っていた。このことから、副指導者をサブとする考え方は、少なくとも知的障害特別支援学校においては適当でないことを示した。

研究成果の概要(英文)：Team teaching has become a regular form of instruction in special needs school for children with intellectual disabilities. In the "Asa no kai (Morning Meeting)" program in elementary school section, it was observed that the main teacher led the program and the assist teacher gave individual instruction to the children. In addition, the assist teacher looked at the main teacher more often than the main teacher looked at the assist teacher. It was confirmed that the main teacher was teaching the class while observing all the children in the class, and the assist teacher was providing individual instruction to each child while checking the teaching behavior of the main teacher. However, teachers showed a little teacher-teacher interaction in the "Asa no kai (Morning Meeting)" program because the program was routine.

研究分野：特別支援教育

キーワード：チームティーチング 教師間インタラクション 特別支援学校 知的障害 朝の会

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

特別支援学校の授業は個に応じた指導をすすめるために複数の教員によるチームティーチングで行われることが多い。この形態で指導効果をあげるためには教師間の連携が重要になると考えられる。チームティーチングによる授業において、各々の教師は授業の進行に伴う児童生徒の反応に即して他の教師の行動と共同するように自らの行動を修正しなくてはならない。その時、教師間にはマルチモーダルなインターアクションが働いていることが推測される。しかし、従来の特別支援学校における授業研究の多くは主担当者の教授行動に関心が限定しており(高野・有働、2011; 福山、2014)、チームティーチングにおける教師間の共同行為の実態は不明なことも多い。

### 2. 研究の目的

知的障害特別支援学校におけるチームティーチングによる授業では、一般的に、ひとりの教師が主指導者となり、他の教師が副指導者となって教育活動を展開していく。しかし、主指導者と副指導者の役割や連携について実証的に調べた研究は少ない。そこで、ほとんどの学校がチームティーチングで行っている小学部の「朝の会」に注目して、教師間インターアクションの様相を明らかにし、効果的なチームティーチングの条件について考察することを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 対象

調査対象としたのは知的障害の児童を教育する特別支援学校小学部の8学級の授業である。各学級の在籍児童数は4～7名であり、2～3名の教師で担当している。主指導者の教師(MT)及び副指導者の教師(ST1とST2)の年齢や教師経験年数を表1に示す。

表1 調査学級の児童と教師

学級名	A	B	C	D	E	F	G	H
学年	1年	1年	2年	3年	3年	3年	3年	6年
児童数	6人	5人	7人	6人	4人	4人	5人	7人
MT 教師歴	40代 12年	40代 17年	30代 4年	20代 1年	40代 18年	40代 22年	40代 25年	20代 5年
ST1 教師歴	50代 37年	20代 2年	50代 31年	50代 34年	30代 9年	30代 7年	30代 10年	20代 7年
ST2 教師歴	20代 5年		30代 3年	30代 9年			20代 4年	

#### (2) 対象授業

調査したいずれの学級も「朝の会」を登校後の最初の授業として毎日実施していた。「朝の会」の主な活動は「朝の挨拶」「出席確認」「健康確認」「カレンダーと天気学習」「日課の確認」である。学級によっては、それらの内容に加えて「絵本の読み聞かせ」「今月の歌」「給食献立」に関連した学習を実施していた。「朝の会」に要した時間は最も短い学級が13分25秒、最も長い学級が26分20秒だった。

#### (3) 資料収集の手続き

教室の四隅と後方にビデオカメラ(Sony, FDR-AX100)を固定し、登校後からの児童と教師の

活動を記録した。授業前にビデオカメラを設置してから授業後に回収するまで、教室には児童と教師のみがいる状況にした。

#### (4) 分析方法

「朝の会」の開始から終了までの映像をもとに、教師と生徒の発話を5秒毎に区切りながらトランスクリプトした。さらに、映像記録をもとに各教師の視線の向きを記録した。なお、各教室の「朝の会」に要した時間が異なるので、分析には授業開始から160回目の区切りまで(13分15秒間)の記録を使用した。

#### (5) 倫理的配慮

研究について、学校に文書及び口頭で説明した後、児童の保護者に文書で説明し承諾を得た。また、調査時に勤務していた大学の研究倫理委員会の承認を得ている。

### 4. 研究成果

#### (1) 視線の向きから推測した教師間インタラクション

図1はC学級の教師の視線の向きを示したものであり、上段が主指導者、中段と下段が副指導者の視線である。主指導者に関しては副指導者、児童、それ以外(教材等)への視線、副指導者に関しては主指導者、他の副指導者、児童、それ以外(教材等)への視線を時系列で示している。主指導者は授業中にほとんど副指導者に視線を向けないが、副指導者は主指導者に7~26回(平均14.3回)視線を向けていた。一方、副指導者が他の副指導者に視線を向けた回数は0~14回(平均6.3回)と少なかった。A学級とD学級についても同様の傾向が示された。なお、児童が教師の想定外の行動を示した場面と準備した教材に間違いがあった場面等において、副指導者が他の副指導者に視線を向ける頻度が高まった。

副指導者が主指導者に頻繁に視線を向けていることから、副指導者は主指導者の授業展開に沿って児童の指導を行っていることが推察できた。一方、副指導者は他の副指導者を見るのが少なかった。これは一方の副指導者が児童の逸脱行動を指導している時に、他方の副指導者がそのカバーに入る場面でも教師間で顕著な視線の交換が観察されなかった。授業で想定される事案に対しては教師間で暗黙の了解があることが推察された。

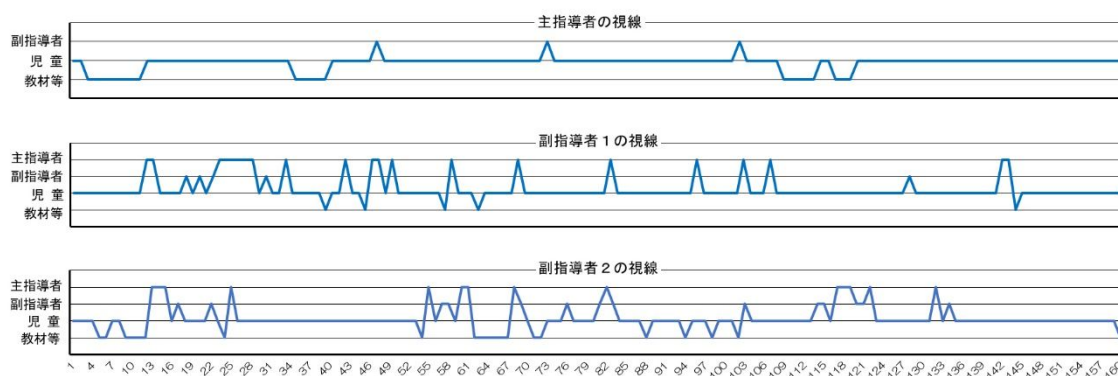


図1 教師の視線の変化

#### (2) 副指導者の教師行動

今回の授業における副指導者の教師行動を山下・松崎(2019)を参考に分類したところ、表2の7つのカテゴリーに分けることができた。このカテゴリーにおける「強調」「評価」「代行」「援助」「連携」は主指導者の授業展開にそって出現しており、主指導者と副指導者の共同的な行為であった。一方、副指導者は主指導者の授業展開に無関係に児童を個別に指導する場面があり、「ST指導」とした。

表2 教師行動のカテゴリー

カテゴリー	内 容
強調	主担当の発言や動作を副担当が繰り返す行為
評価	児童生徒の活動への教師の肯定的な反応
代行	主担当の発言等により児童に期待される発話等を副担当が行うこと
援助	主担当の発問等により副担当が特定の児童に対して行う指導・援助
連携	発話や視線等で他の教師の行動を促す行為
ST指導	主担当の授業に係わらず児童の逸脱行動等に対応する副担当の指導

図2はD学級の副指導員における各カテゴリーに該当する行動が出現した回数である。いずれの副指導者においても出現回数が多い行動は「強調」「援助」であった。「連携」に該当する行動は主指導者に出現したが、副指導者には出現しなかった。「代行」は副指導者1に16回出現したが、副指導者2には出現しなかった。

「ST指導」の出現回数は副指導者1が3回、副指導者2が2回であった。以上のことから、副指導者は授業時間の多くを主指導者の授業展開に沿いながら児童への個別指導を行っているが、必要に応じて主指導者の授業展開から外れた指導を行っていることが確認できた。

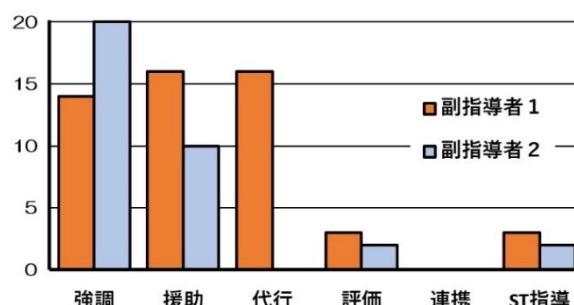


図2 副指導者における各カテゴリーの出現回数

ところで、山下・松崎(2019)は肢体不自由特別支援学校の授業において、副指導者から主指導者への働きかけ及び副指導者間の連携が観察されたことを報告した。しかし、今回対象とした授業では主指導者から副指導者への視線等だけが授業行動に関連していた。今回の対象とした「朝の会」がルーチン化した教育活動であることが影響したと考えた。

### (3) 教師間で視線が交錯する事例

主指導者が副指導者に視線を向けること、あるいは副指導者が他の副指導者に視線を向ける頻度は低かった。しかし、前述したように準備した教材に間違いがあった場面や児童が教師の想定外の行動を示した場面で主指導者と副指導者、あるいは副指導者間で視線が活発に交錯することが観察された。以下に、事例としてその状況を示す。

まず、準備した教材に間違いがあった場面を図3に示す。D学級の主指導員である教師(MT)が授業全体をリードして「朝の挨拶」「健康確認」「カレンダーと天気学習」と進行し、「日課の確認」に移った場面である。通常なら、MTは日課を示したカードを黒板に掲示したうえで、「朝の会」授業を開始している。ところが、当日はこのカードの提示を忘れていた。MTは授業を中断してカードを黒板に提示したのだが、その際に最もキャリアのある副指導者(ST1)に視線を送った。その視線を受けたST1は、比較的理解力の高いAさんにお手伝いについて話をした。その様子を一方の副指導者(ST2)が観ている時にB君が立ち上がり黒板の前に行こうとした。そのB君の行動をST2が制御したが、それをST1が観察しており、B君に「明日やって」と話しかけることになった。

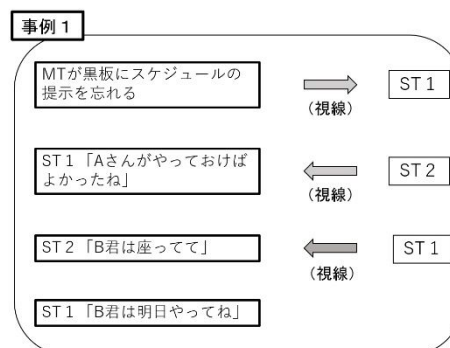


図3 主指導者が想定外の行動を示したことによる事例



次に、児童の行動が想定外だったことから教師間の視線の交錯が活発になったC学級の事例を図4に示す。主指導者（MT）は給食の献立に関連させて、絵カードを使って野菜の名前を発表させていた。MTが隠し持っていた大根の絵カードをC君に見せようとしたところ、C君はカードの一部分を覗きただけで正解を答えることができた。その様子を観察した副指導者二人は互いに見合わせて「すごい」と感動し、副指導者の一人（ST1）がMTにC君の反応の確認を行っている。MTにとってもC君の反応は予想外だったため、副指導者二人にC君の行動を確認し、改めて副指導者の一人（ST2）が他の二人の教師にC君への感想を述べている。

これらの事例は指導がルーチン化していない教科等のチームティーチングで教師間インタラクションが明確になる可能性を示している。

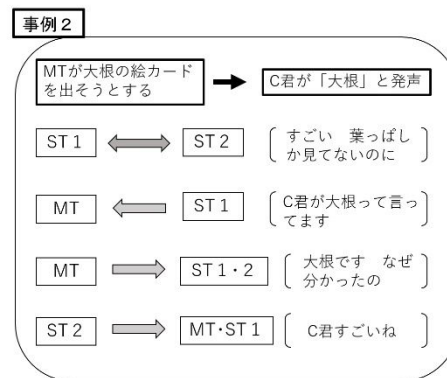


図4 児童が想定外の行動を示したことによる事例

#### （4）チームティーチングにおける教師間インタラクションについて

知的障害特別支援学校の授業の多くがチームティーチングで実施されているが、一般的に主指導者が授業を計画・展開し、副指導者は主指導者が展開する授業の補助を行うと考えられている。そのため副指導者をサブティーチャーと呼ぶこともあり、教科書によってはチームティーチングの副指導者は主指導者の指示以外の行動を行ってはいけないと記述している（神山、2009）。今回の調査において、主指導者は主に授業を進行し、副指導者は児童の個別指導・支援を行っていた。さらに副指導者の教授行動は主指導者の計画の範囲を超えていた。これらことから、副指導者をサブとする考え方は知的障害特別支援学校において適当でない。また、特別支援学校小学部において、「朝の会」はチームティーチングで行うことが一般的である。そのため、教師間のインタラクションの実態を観察するうえで「朝の会」の授業は適していると考えたが、教師間の声かけや視線等の出現は少なかった。これは「朝の会」の活動内容を教師全員が理解しているため、教師間の共同した活動のために視線や声かけ等が不要であったためと考える。指導がルーチン化していない教科等の指導について調べる必要がある。さらに、チームティーチングによる指導に教師と児童の位置関係が大きく影響することを報告した（松崎・城間・山之内、2023）。それ以外の要因の影響についても確認する必要がある。

#### <引用文献>

- 神山寛（2009）授業改善のための指導案作成による取り組み．日本肢体不自由教育研究会監修、肢体不自由教育シリーズ4 専門性向上につなげる授業の評価・改善、慶應義塾大学出版会、89-97．
- 福山恵美子（2014）知的障がい特別支援学校におけるチーム・ティーチングに関する実践的研究（第報）．大阪教育大学紀要第 部門、63（1）、155-169．
- 松崎保弘・城間園子・山之内幹（2023）コロナ渦における特別支援学校のチームティーチング．福岡女学院大学紀要人間関係学部編、25、57-63．
- 高野美由紀・有働真理子（2011）特別支援学校における教師と児童のインタラクション、兵庫教育大学研究紀要、39、59 - 66．
- 山下奈々・松崎保弘（2019）特別支援学校のチーム ティーチングにおける教師間インタラクション．日本特別ニーズ教育学会第 25 回研究大会（長崎大学）．

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松崎 保弘、城間 園子、山之内 幹	4. 巻 25
2. 論文標題 コロナ禍における特別支援学校のチームティーチング - 知的障害特別支援学校小学部における「朝の会」の事例から -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編	6. 最初と最後の頁 57-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松崎 保弘、山之内 幹、城間 園子
2. 発表標題 チームティーチングにおける教師間インターアクション
3. 学会等名 特殊教育学会第60回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 城間 園子、松崎 保弘、山之内 幹
2. 発表標題 知的特別支援学校におけるチームティーチングの一考察
3. 学会等名 特殊教育学会第61回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松崎 保弘、城間 園子、山之内 幹
2. 発表標題 コロナ禍における特別支援学校のチームティーチング
3. 学会等名 特殊教育学会第61回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松崎 保弘、城間 園子
2. 発表標題 知的障害特別支援学校のチームティーチングについて
3. 学会等名 特殊教育学会第62回研究大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山之内 幹 (Yamanouchi Miki)  (00866494)	南九州大学・人間発達学部・准教授  (37601)	
研究分担者	城間 園子 (Shiroma Sonoko)  (30782346)	琉球大学・教育学研究科・准教授  (18001)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------